

責任者	社会学研究科委員長	作成部局	社会学研究科
-----	-----------	------	--------

2021年度に向けた教育研究目標

【A票:教育研究目標1】

(タイトル)

研究方法や研究対象の専門分化にもとづきながら、それらを総合的に応用し、複雑化する現代社会を分析できる人材を育成する。

(狙い内容)

社会学・社会心理学的研究は、研究方法(理論的研究、実証的研究、量的研究、質的研究など)や研究対象によって、ますます専門分化が進んでいるが、このような専門分化にもとづきながら、それらを総合的に把握することのできる力を身につけることによって、複雑化する現代社会を総合的に分析できる人材を育成する必要がある。

1. 6年後(2021年度)の目指す姿(目標)

研究方法(理論的研究、実証的研究、量的研究、質的研究など)や研究対象による専門分化に応じた、幅広くかつ系統的な専門的教育プログラム、およびそれらを総合的・全体的に把握し、複雑化する現代社会を総合的に分析するための教育プログラムを整備するとともに、充実した教育環境(社会学研究科と先端社会研究所との連携事業である大学院生サポートプログラムGSSPによる大学院生個人および相互の自主的学習・研究活動のサポート)が整備される。

2. 上記の目標を設定した背景、課題及び現状分析について、記述してください。

「ソシオリテラシー」にもとづいた総合的研究という教育目標は、大学院GP以来、受け継がれてきたものであるが、学士課程教育のカリキュラムがより系統性重視の方向に舵を切ったこともあり、博士課程教育においても、改めて研究方法や研究対象にもとづく専門性と系統性の重要性を確認し、総合性・全体性とのバランスをとっていく必要がある。また、すでに社会学研究科では、大学院生サポートプログラム(GSSP)事業として、『KG社会学批評』刊行支援、大学院生主体の研究会の支援、大学院生による国際的な研究発信の支援、大学院生サポートプログラムセミナーの開催を行なうとともに、大学院生の「研究成果発表会」を定期的に行なうなど、大学院生個人および相互の自主的学習・研究活動のサポートにおいて、きわめて先進的な取り組みを続けている。今後も、このような取り組みを維持し、継続していく必要がある。

3. 達成度評価

評価指標	この教育目標は、研究科の教育のいわば方向性を示すものであり、その達成度を直接的かつ数量的に測定できる種類のものではない。むしろ、この教育目標を達成するための、さまざまな教育活動(下記の行動計画)の向上を示す指標によって、代替すべきものである。	評価尺度	A: B: C: D:
------	---	------	----------------------

4. 年度毎の目標値

2015年度(現状)	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度

【A票:教育研究目標2】

(タイトル)

論文執筆や外国語によるプレゼンテーションのための教育プログラムによって、国際的に通用する研究に貢献できる人材を育成する。

(狙い内容)

論文執筆の技能を向上させるとともに、外国語によるプレゼンテーションや論文執筆を指導することによって、日本国内においてばかりでなく、国際的に活躍できる人材を育成する。

1. 6年後(2021年度)の目指す姿(目標)

論文執筆の技能を向上させるとともに、外国語によるプレゼンテーションや論文執筆を指導することによって、日本国内においてばかりでなく、国際的に活躍できる人材を育成する。

2. 上記の目標を設定した背景、課題及び現状分析について、記述してください。

今日の大学院教育において、日本国内ばかりでなく、国際的に活躍できる人材を育成するためには、論文執筆の技能を向上させるとともに、外国語によるプレゼンテーションや論文執筆を指導することは、不可欠である。すでに社会学研究科では、論文執筆の技能を向上させるための授業や、外国語によるプレゼンテーションのための授業を取り入れている(「先端社会講義E」「先端社会研究E」)ばかりでなく、大学院生サポートプログラム(GSSP)事業の一環として、オーストラリア国立大学でのセミナーへの派遣によって、大学院生の国際的な研究発信を支援してきた。したがって、このような先進的な取り組みを今後も維持し、継続していく必要がある。

3. 達成度評価

評価指標	この教育目標は、その達成度を直接的かつ数量的に測定できる種類のものではない。むしろ、この教育目標を達成するための、さまざまな教育活動(下記の行動計画)の向上を示す指標によって、代替すべきものである。	評価尺度	A: B: C: D:
------	---	------	----------------------

4. 年度毎の目標値

2015年度(現状)	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度

【A票:教育研究目標3】**(タイトル)**

博士学位(課程博士)取得に至るまでの段階・プロセスをモデル化するとともに、「博士学位キャンディデート」を授与することによって、博士学位(課程博士)の取得を促進する。

(狙い内容)

学位取得の段階・プロセスをモデル化することによって、論文や学会発表を積み重ねながら、それらを学位論文の執筆へとつなげていくことが可能になる。また「博士学位キャンディデート」の授与は、一定の条件を設けることによって、学位論文執筆に先行する目標となるとともに、授与後に(学位論文提出までの)期限を設けることによって、学位論文の提出を促進し動機づけるものである。

1. 6年後(2021年度)の目指す姿(目標)

博士学位(課程博士)取得に至るプロセス・モデルが浸透し、これを指針に、「博士学位キャンディデート」の取得、博士学位論文の提出、博士学位(課程博士)の取得へと進むことが定着する。

2. 上記の目標を設定した背景、課題及び現状分析について、記述してください。

すでに社会学研究科では、学位取得の段階・プロセスをモデル化し、「博士学位キャンディデート」取得を制度化しており、浸透と定着が進んでいる。これによって、論文や学会発表を積み重ねながら、それらを博士学位論文の執筆へとつなげていくことが可能になっている。「博士学位キャンディデート」申請者数が少ないなど、いくつかの問題はあるものの、基本的には学位論文提出の促進と動機づけに成功している。今後も、このような先進的な取り組みを維持・継続していく必要がある。なお、言うまでもなく、この研究教育目標の達成は、他の研究教育目標の達成を基礎とし、それに依存するものであることを確認しておく。

3. 達成度評価

評価指標	「博士学位キャンディデート」および博士学位(課程博士)の取得者数	評価尺度	A:3名以上 B:2名 C:1名 D:0名
-------------	----------------------------------	-------------	--------------------------------

4. 年度毎の目標値

2015年度(現状)	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
1名	1名	2名	2名	2名	3名	3名